HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『コリアキ土人調査書』解題と翻刻
Author(s)	呉人, 惠; 栄, 夏代; 中条, 充子
Citation	北方人文研究, 9, 115-141
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/61296
Type	bulletin (other)
File Information	09_07_kurebito.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

〈研究ノート〉

『コリアキ土人調査書』解題と翻刻[1]

呉人　惠（富山大学）　栄夏代（富山県公文書館）　中条充子（富山県公文書館）

1．はじめに

北海道大学附属図書館北方資料室所蔵の『コリアキ土人調査書』（請求記号：別シ／957.7／KOR、書誌ID=2001060459 NCID=BA60650697）（以下、『調査書』と略す）は、明治時代に市郎兵衛なる人物が、ロシア領カムチャツカ半島東海岸に視察に訪れ、そこで出会った「コリアキ族」の風俗習慣、言語、衣食住などに関し記述したものである。和装袋綴じで縦書き墨付 17 丁（全 32 頁）に、6 枚の手描きの折込画からなる。なお、『調査書』は北海道大学水産学部旧蔵書（2003 年に移管）で、同学部の前身である函館高等水産学校図書課の蔵書印と同図書館の蔵書票を伴う。その表紙（写真 1）によれば、『調査書』は、明治 34 年（西暦 1901 年）12 月 21 日に北海道に提出されている。

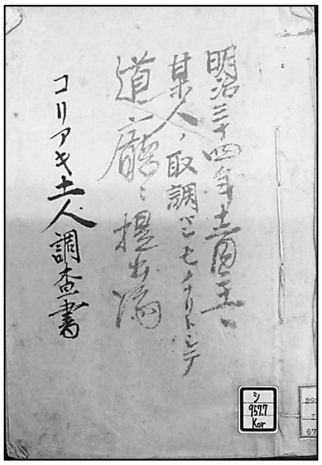


写真 1
『コリアキ土人調査書』表紙

本稿では、『調査書』の解題と翻刻をおこなう。解題部分は呉人が担当し、翻刻部分は栄・中条の両氏が担当する。『調査書』では、「コリアキ」の風俗習慣、衣食住について記述されているだけでなく、ロシア語の単語以外に、著者が「土語」というところの 27 語が挙げられており、言語学的にも貴重な資料として位置づけられる。そこで、本稿ではこの「コリアキ」の話す言語に焦点を絞って解題をおこなう。「コリアキ」とは、「コリャーク」に相当する民族名であると考えられるが、厳密にいえば、調査がおこなわれたのは、現代コリャーク語分類上の「コリャーク語」ではなく、かつてはその一方言としての「アリュートル方言 (Alutor)」、現代では独立の言語とみなされている「アリュートル語」が分布する地域である。そこで、本稿ではコリャーク語との音韻対応の検討により、これらの単語がアリュートル語であることを示す。

ところで、『調査書』は、言語学的のみならず、民族学的にも貴重な記述である。ちょうど同じ時期、すなわち、1900 年から 1901 年にかけての冬期に、ロシア人ヨヘルソンは、北米の人類学者フランツ・ボアズ (Franz Boas) の組織するジェサップ北太平洋探検隊 (Jesup North Pacific Expedition) の調査の一環として、コリャークに関する民族学的

[1] 本稿をまとめるにあたって、永山ゆかり氏（北海道大学）には、地名の特定やアリュートル語についての貴重なご教示をいただいた。佐々木史郎氏（国立民族学博物館）、渡部裕氏（元北海道立北方民族博物館）には、『調査書』が書かれた歴史的背景などについての情報、鈴木俊幸氏（中央大学）には『調査書』を読み解くために重要なご教示をいただいた。さらに、3 名の匿名査読者の方々には、本稿に関するきわめて有益なご指摘やご助言をいただいた。ここに、記して感謝の意を表したい。

フィールドワークをおこなった。調査はオホーツク海に面するペンジナ湾、ギジガ湾に分布する海岸定住民コリャーク、タイゴノス半島およびギジガの内陸部に分布するトナカイ遊牧民コリャークを対象におこなわれ、その成果は Jochelson (1908) としてまとめられた。一方、『調査書』は、Jochelson (1908) で対象としていない太平洋側の「コリアキ」を扱っており、その意味でも重要な意義を持つ。ただし、本稿では紙幅の制限上、調査書の記述全体に踏み込むことはできないため、Jochelson (1908) との比較を含め、民族学的側面からの考察は今後の課題としたい。

２．解題

２．１．構成

『調査書』は、表紙（写真 1）をめくり、見開きの左ページから始まる「緒言」の最初のページからページを数えると、それ以降の文字部分は次のような構成となっている。

(1) 緒言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.1
(2)『西伯利地誌』299～304 ページ抜粋部分・・・・・・・・・p.2
(3) 容貌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.7
(4) 言語・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.9
(5) 衣服・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.12
(6) 食物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.14
(7) 住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.17
(8) 器具・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.20
(9) 性質・習慣・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.28
(10)宗教・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.29
(11)職業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.29
(12)雑事・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.30

各項目の詳細については、本稿第 2 節の翻刻部分を読んでいただくとして、ここでは、それらの記述から浮かび上がってくる調査の概要を述べたうえで、特に 9 ページから 12 ページに記述されている「コリアキ」の話す言語の特徴に焦点を置いて考察をおこなう。

２．２．歴史的背景

『調査書』が書かれた 1901 年は、1904 年の日露戦争勃発を目前にした時期である。市郎兵衛が訪れたカムチャツカは、伊勢国の大黒屋光太夫が 18 世紀に江戸に向けて出発した途中で嵐に会い、アリューシャン列島に漂流した際、滞在した地として知られているが（桂川 1990）、19 世紀後半以降、日本人の露領漁業の場所として重要な意味を持つようになる。

日本は、樺太における権益を放棄する代わりに、得撫島以北の千島 18 島をロシアに譲渡することや漁業権について 1875 年に締結した「樺太・千島交換条約」により、ロ

シア領サハリン地域、沿海州を中心とした地域、カムチャツカ半島でのロシア領漁業が認められるようになった。カムチャツカ半島への日本人の出漁は、中でも一番遅く、この方面においては、1896 年、ロシアのオットセイ会社に雇用された日本人漁業関係者が最初とされている（関他 2006）。また、渡部 (2001) によれば、カムチャツカ半島における豊富なサケ資源の情報から 1897 年に日本船が出漁し、さらに 1900 年にはサハリン、沿海地域から転向した漁業者が大挙してカムチャツカに出漁した。翌年、「新産業規則」により日本人漁業者は漁区経営から締め出されたが、買魚などの実質的な漁場経営をおこない、その後も日本人漁業者の出漁は増加した。しかし、日本企業の本格的なカムチャツカ進出が始まったのは、1907 年に締結された日露漁業協約でサケ・マス漁が公的に認められてからだという。

渡部 (2001) は、カムチャツカにおける日本人と先住民の接触のあり方について、日本人に対する規制と雇用関係から 4 つの時期に分類している。すなわち、上述のカムチャツカへの日本人の最初の出漁があった年から日露漁業協約が結ばれた年までの「初期の接触期」(1896~1907)、日露漁業協約によりカムチャツカへの日本人企業の進出が本格的になり、多い時には 13,000 人の日本人従業員がいたとされる「本格的な接触期」(1908～1921）、ロシア革命以降、ソ連体制が確立して日本人に対する漁場の貸し出しや漁獲量に厳しい制限がかけられるようになる「接触規制期Ⅰ」(1922～1932)、ソ連企業による日本人雇用が全くなくなり、日本企業も日魯漁業一社に限定された「接触規制期Ⅱ」(1933 年～1945) である。

市郎兵衛がカムチャツカを視察に訪れたのは、このうち「初期の接触期」にあたるが、この時期でもカムチャツカにおけるロシア企業による日本人雇用は、1896 年 46 名、1897 年 132 名、1898 年 116 名、1899 年 222 名、1900 年 1,569 名、1901 年には 247 名であったとされている（岡本 1971）。また、当時、日本人と先住民の接触があった地域は、カムチャツカ東海岸ではコルフ湾、オゼルナヤ川河口、カムチャツカ川河口、クロノツキー川河口、アヴァチャ湾であったが（渡部 2001）、このうち、市郎兵衛が訪れたのは、後述するようにコルフ湾沿いの地域であったと考えられる。

「緒言」では、市郎兵衛が、明治 34 年 7 月末にロシア領カムチャツカ半島東海岸を「視察」に訪れて、備忘のために『調査書』を記したことが記述され、「明治卅四年八月廿八日（明治 34 年 8 月 28 日）」と結ばれている。滞在が短かったとも記されていることから、市郎兵衛は 7 月末から 8 月 28 日の間の何日間か視察に訪れ、『調査書』を書いたものと思われる。滞在中に書いたか、帰国後書いたかは不明であるが、上述のように「緒言」の後、本文の冒頭で参謀本部編纂『西伯利地誌』(1892) の数ページを、多少の書き換えはあるもののほぼそのまま引用していたり、「言語」の項目で、収集したロシア語やコリャーク語の単語を整然と表示していることなどを考えると、単なる備忘録ではなく、北海道庁に提出するために、改めて整理して書かれたものである可能性が浮かび上がる。また、表紙（写真 1）は、「明治三十四年十二月二十一日某人ノ取調ベシモノナリトシテ道廳ニ提出濟」と、市郎兵衛を指して「某人」としていることから、市郎兵衛が北海道庁に提出後、別人物（おそらく道庁の役人か）が書いたとも推測される。

『調査書』の記述からは、市郎兵衛がどのような人物でどのような目的で出かけたのかはわからないが、市郎兵衛は「緒言」で「視察」と記しており、かつ帰国後、北海道

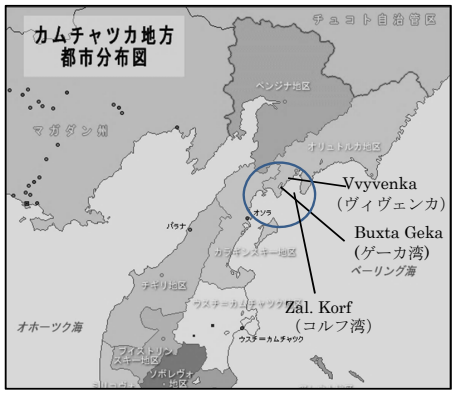
庁にこの『調査書』を提出したことから、公的な任務を帯びていたことがうかがわれる。

加えて、『調査書』では、上述のとおり、当時のシベリアに関するきわめて数少ない文献であった参謀本部編纂『西伯利地誌』(1892) が書き写され、記述の参考にされている。この書は、「総論」・「天然部」（自然地理）・「国体部」（人文地理）・歴史の四部からなり、ロシアの第一級学者の著作を参考にしてシベリアという広大な地域についてきわめて詳細に論じたものである（アバ　2015, 原 1998）。一般の漁民がそもそもこのような学術書を入手していたとも、記述にあたってそれを周到に参照するとも考えにくい。

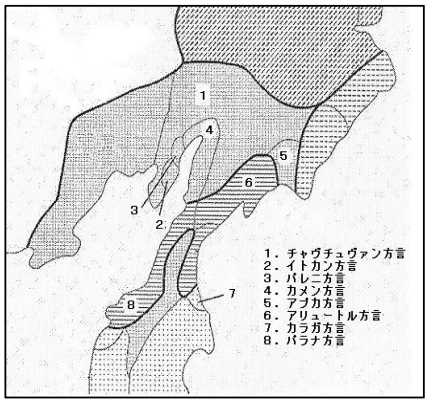
２．３．視察地域

「緒言」によれば、市郎兵衛が視察に訪れたのは、ロシア領カムチャツカ半島東海岸の 3 地点である。すなわち、「ギエカ湾」、「ジビル港」あるいは「シビル港」、「ウエウエニスキ湖」あるいは「ウエ／＼ニスク（湖）」である。「あるいは」としているのは、本文中、筆者の表記に揺れがあるためである。

このうち、「ジビル」は、「シビル」の誤りではないかと思われる。コルフ湾の、現在では廃村となっているクルトゥシノ村 (Kultushino) 近くに Gavan’ Sivir’、すなわち「シビル湾」がある。ちなみに、本文中に「ジビル」は冒頭に 1 カ所しか現れないのに対し、それ以外の 7 カ所はすべて「シビル」である。「シビル」はロシア語で「シベリア」を意味する Sibir’ と関係があることが推測される。一方、ギエカ湾は北緯 60 度、ウエウエニスキ湖はそれより北十数里、シビル港はさらに北二十数里にあるとされている。「ウエウエニスキ湖」と「ウエ／＼ニスク（湖）」は、形容詞形「ウエウエニスキ」と名詞形「ウエ／＼ニスク」を混用していることによる。ちなみに、前者は「ウエウエニスキ湖」という形で 1 カ所出現しているだけであるが、一方、「ウエ／＼ニスク」は 5 カ所出現している中で、「湖」を伴うのは 1 カ所のみ、それ以外は「ウエ／＼ニスクニ」と場所格の「ニ」を伴って名詞的に用いられている。



地図 1
市郎兵衛が訪れた地域（〇で囲った部分）



地図 2　Stebnitskij (1937)によるコリャーク語の方言分類(Fortescue 2005 にもとづき作成)

これら 3 つの地名のうち、「シビル港」は確認できていないが、「ギエカ湾」と「ウエウエニスキ湖」あるいは「ウエ／＼ニスク（湖）」は、前者は Buxta Geka（ゲーカ湾）、後者は Vyvenka（ヴィヴェンカ）という地名に対応するのではないかと推測できる（Google Map より）[2]。現在のオリュトル地区に属しており、上述のコルフ湾の沿岸地域である。ちなみに、地図 2 に示すように、この地域は Stebnitsij (1937) の方言分類上は、コリャーク語アリュートル方言が分布する地域である。

このように、この地域の言語は、かつてはコリャーク語の一方言、アリュートル方言として分類されていたが、現在では、アリュートル方言ではなく、独立の言語、アリュートル語として数えられるようになっている (Skorik 1968, Zhukova 1968)。ちなみに、アリュートル語は従来、ほとんど知られておらず、2000 年に初めて包括的な文法が書かれた (Kibrik i dr. 2000)[3]。また近年では、永山ゆかり氏（北海道大学）が精力的に現地調査をおこなっており、アリュートル語についての文法記述をロシア語で刊行している (Nagayama 2003)。

次の 2.4.では、市郎兵衛が出会った「コリアキ」が話す言語がアリュートル語であったことを、『調査書』の「言語」の項目に記述された単語の音韻的特徴等から確認する。

２．４．言語

２．４．１．「露西亜語」

下の翻刻に見るように、『調査書』の 9 ページから 12 ページには、市郎兵衛が聞いたとされるロシア語の単語と「コリアキ」の単語がカタカナで表記されている。まずロシア語から見ていく。記述によれば、「露西亜語ヲ解スルコト少ナシ」とあるように、ロシア語を理解するコリアキは少なかったようである。ロシア語への同化が急激に進み、大半の人々がロシア語を日常語とするようになっている現在とは、母語の保存度にかなりの違いがあることがわかる。9 ページにロシア語として表示されているのは 22 語である（ただし、このうち「ホーダ（宜シカラズ）」はロシア語かどうか不明）。「はい」「いいえ」の類の間投詞、船関係、動物などに関する語、ロシア人から入手していたと思われるタバコ、砂糖、茶を表わす語などが見られる。

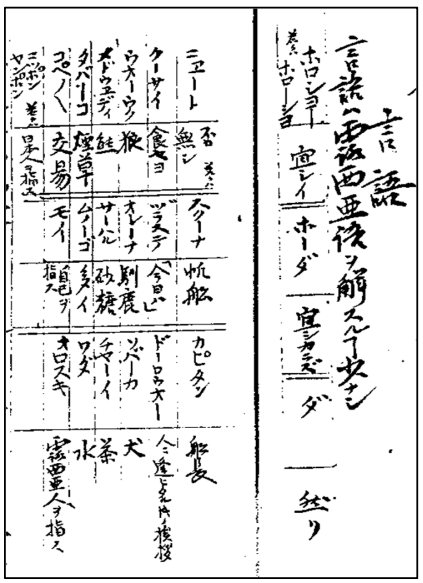


写真 2　ロシア語の語彙表

[2] 本稿の 3 名の査読者のうち、査読者 3 の方によれば、「ウエウエニスキ湖」という名称の湖はないので、日本人漁業者のあいだでの通称かもしれないとのことである。なお、Vyvenka 近くの湖としてはアリュートル語で Majŋ-ə-ɣətɣən「大きな湖」という名前の湖がある（Wikimapia より）。

[3] 当初ロシア語で書かれた Kibrik i dr. (2000) は、英語版に翻訳されたが (Kibrik et al. 2004)、筆者はこのうち、Part 1 のテキスト部分の翻訳と全体の編集にかかわった。

カタカナ表記に対応するロシア語は次のとおりである：ホロショー(xorosho)／ホローショ (xoroshij~xorosh)[4]、ホーダ (??)、ダ (da)、ニェート (net)、スクーナ (skuna)、カピタン (kapitan)、クーサイ (kushaj)、ヅラステ (zdravstvujte)、ドーロウオー (zdorova)、ウオーウク (volk)、オレーナ (olen')、ソバーカ (sobaka)、メドウェディ (medved')、サーハル (saxar)、チャーイ (chaj)、タバーコ (tabak)、ムノーゴ (mnogo)、ワダ (voda)、コペコペ (kopekope)、モイ (moj)、ォロスキ (russkij)、ニッポン／ヤンポン (Japon)。

この他、この表から読み取れる点はいろいろあるが、ここでは 3 点のみにとどめる。

まず第一に、表には純粋にロシア語とは思えない語も挙げられている点である。たとえば、「交易」を表わす「コペ／＼」は、むしろ重複という語構成からみるとアリュートル語の名詞絶対格単数形を想起させる（たとえば、liŋliŋ 'heart'、wilwil 'sour (fermented) fish'、kalikal 'letter' [Kibrik et al. 2004]）。「コペ」はロシア語の kopejka「コペイカ銅貨」の kope の部分である可能性もある[5]。ちなみに、コリャーク語では、ロシア語からの借用語を重複させて名詞絶対格単数形を作る例が見られる（tʃajtʃaj <（露）chaj「茶」、tʃol'tʃol'<（露）sol'「塩」）。

第二に、「ホロショー」「オレーナ」「ソバーカ」「ムノーゴ」などの語が、実際の発音を反映しておらず、むしろ文字を転写表記したもののように見える点があげられる。ロシア語では、/o/ はアクセントが落ちない音節では [a] で発音されるため、[xaraʃo:][ale:n^{j}][saba:ka] と語頭の母音は [a] で発音されるはずである。しかし、書き言葉では、xorosho, olen', sobaka と表記されるため、この表記をまねて記述した可能性がある。理由はわからない。

第三に、「ニッポン」という日本語が見えることである。これは、この時代、すでに日本人との接触があったか、あるいは日本人についての知識があったことをうかがわせる。ちなみに、渡部 (2001) によれば日本人は、①サケの売買関係、②漁業の技術指導、③先住民の雇用、④毛皮の売買、⑤漁場の番人、⑥医療サービスなどを通じてカムチャツカ先住民と接触していたという。また、このような接触の中で sentoh「船頭」、カワサキ「モーターボート」、サンパン「三羽船」、クリバン「唐繰番」などの語が先住民の言語に借用されたという（渡部 2001, 2011）[6]。

２．４．２．「土語」

『調査書』が冒頭に引用し参考にした参謀本部編纂『西伯利地誌』(1892) では、コリヤークの話す言語について「言語は歯音・喉音多ク又数派に分ル、露語ヲ学ヒ得ル者少ナシ、都テ知識ノ発達甚ダ鈍シ」と、ロシア語が理解できないことを理由にした侮蔑的

[4]「ホローシ」は、長語尾形の xoroshij「よい」を指すものか xorosh「もう十分」を指すものかは判断できない。

[5] 査読者 3 の方は、kopekope はロシア語の kupit'「買う」に由来する可能性はないかと指摘しておられる。ただし、動詞が重複形となる例は筆者の知る限りないため、断定は避けたい。

[6] 表記は渡部 (2001, 2011) に従う。さらに渡部裕氏（私信）によれば、氏が現地調査をした際、サケをご飯といっしょに食べる料理をアリュートルの人々が「マンマ」と呼んでいたという。日本語の「まんま（飯）」を想起させる。

な記述が 2 行だけなされているのに対し、『調査書』では実際に耳にした「土語」をカタカナでなんとかわかるように表記しようとした苦心のあとが見られる。

10 ページには、「土語若干ヲ掲グ」として、魚名、動物名、衣類名、身体部位名称等、表示されているのが 23 語、その他、地の文で 4 語が挙げられている（具体例は下の翻刻を参照のこと）。ただし、このうち「上着（コート）」を表わす「パリト」はロシア語の pal'to を借用したものであることは間違いない[7]。それ以外は「土語」であると考えられるが、魚名や動物名については Kibrik i dr. (2000) や Kurebito (ed.)(2001) では確認することができない。しかし、身体部位名称を見るだけで、市郎兵衛が採集した語彙が、コリャーク語ではなくアリュートル語の特徴をもつことがわかる。下に、市郎兵衛が表示した単語の中から身体部位名称 11 語とそれに対応するアリュートル語とコリャーク語を Kurebito (ed.)(2001) に基づき下表 1 に示す。なお、ここで言う「コリャーク語」とは内陸部でトナカイ遊牧を営むコリャークが主たる話者であるチャヴチュヴェン方言を意味する。

表 1 『調査書』のカタカナ表記・アリュートル語・コリャーク語の対応

	土語	アリュートル語	コリャーク語
鼻	エゲンヌマ	ʕiŋətʕəm	ʕiŋətʕəm
口	レゴレンガ	rəkərŋən	jikiŋən
耳	ミルー	*viluw*	*viluw*
髭	レルーウ	*leluw*	*leluw*
顔	ラオロッカ	ləʔulqəl	ləʕulqəl
歯	ワンノーオィ	*wanno*	*wanno*
舌	イエレイ	jiləjil	jiləjil
指	ト°ルーウヮ	*təlɣu*	*jəlɣo*
手	ムノーウ	*kaɣəsqo*	*mənɣo*
爪	ワガラグヌ	vaɣəlŋən	vaɣəlŋən
目	レレーウィ	*ləlew*	*ləlew*

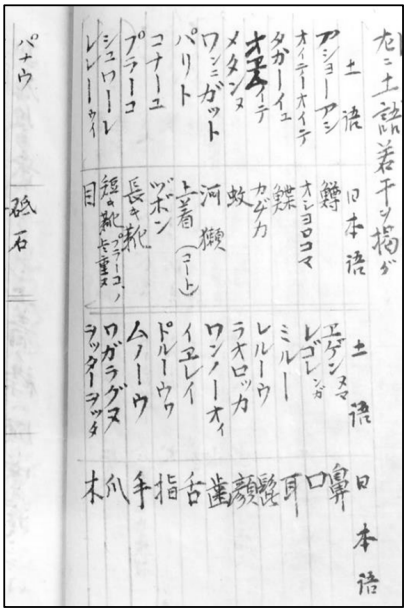


写真 3　土語の語彙表

表 1 のうち、普通体は単数形、イタリック体は複数形であることを示す。「手（複）」を表わす *kaɣəsqo*（アリュートル語）、*mənɣo*（コリャーク語）以外は、音韻対応が見られる。

『調査書』は、「露西亜語」に比べ、「土語」でカタカナにいくつかの工夫が加えられており、表記に苦心した様子をうかがうことができる。たとえば、語によってカタカナの一部が小さく表記されている点である（エゲンヌマ、ワンノーオィ、ト°ルーウヮ、レレーウィ）。小さいカタカナ表記は主に語末に現れていることから、語末の聞きづらい部分を小さく表記したのかもしれない。また、「指」の初頭の音が「ト°」となっているのは、まず日本語にはないシュワ [ə] を既存の [ɯ]

[7] ちなみに査読者 3 の方によれば、20 世紀半ば以降のアリュートル語でヨーロッパ風の上着のことを palʲtu-n というとのことである。

と認識し、さらに日本語にない無声歯茎破裂音 [t] と [ɯ] からなる [tɯ] を表記しようとした工夫の表れであろう。

ちなみに、市郎兵衛は「土人語ハ日本人ニハ満足ニ真似難キ程ノ不思議ナル発音ヲ有ス」(p9)、「以上記スル所日本仮名ヲ以テハ完全ニ土語ノ発音ヲ現ハシ難シ　又其音ヲ聞取ルコトサヘモ難事ナリ」(p10) と、実際に耳にした発音の難しさ、カタカナ表記のしづらさについて記述している。また、「鼻」を表す語を「エゲンヌマ」と「エ」という母音始まりで表記しているが、これは語頭の有声咽頭摩擦音 [ʕ] を聞き取れなかったためであろう。ちなみに、[ʕ] はアラビア語などにはあるものの、珍しい音声であり、音声学の訓練を受けていないと正確に聞き取ることはむずかしい。

しかしながら、上表に挙げた 11 語の身体部位名称だけからでも、「土語」と言われている言語が、コリャーク語ではなくアリュートル語であることはうかがい知ることができる。

上の地図 2 は、Stebnitskij (1937) が初めて試みたコリャーク語の本格的な方言分類に基づいて作成されたものである。当時、アリュートル語はコリャーク語の一方言とみなされていたため、8 方言の一つに数えられている。Stebnitskij (1937) は、8 方言の分類基準として、次の 2 つの音韻的特徴を挙げている。

1) /j̡/[8] と /t~r/ の対応（j̡方言：r 方言あるいは t～r 方言）
2) /e/ と /a/ の対応（e 方言：a 方言）

このうち、表 1 から見て取れるのは、1) の /j̡/ と /t~r/ の対応である。j̡方言と r 方言あるいは t～r 方言の分布は、地理的な南北と対応しているとされている。すなわち、北にはj̡方言、南には r あるいは t～r 方言が分布している。それぞれの方言に属するのは、表 2 に示すとおりである。

表 2　j̡方言と r（t～r）方言の分類

北のj̡方言	南の r あるいは t～r 方言
チャヴチュヴァン方言 カメンスコエ方言 アプカ方言 パレニ方言 イトカン方言	アリュートル方言 カラガ方言 パラナ方言

Stebnitskij (1937:291) は、北のj̡方言の代表としてチャヴチュヴァン方言、南の r あるいは t～r 方言の代表としてアリュートル方言の以下のような語例により、その対応関係を示している。以下、チャヴチュヴァン方言は *Cha.*、アリュートル方言は *Al.* で示す。

[8] Stebnitskij (1934:56) によれば、/j̡/ は音声的には「有声中舌摩擦音 Zvonkij Sredne-jazychnyj Spirant」である。ここで言う「中舌」とは、歯茎の「前舌」、軟口蓋あるいは口蓋垂の「後舌」に対して、硬口蓋の調音位置を示すものであると考えられる。以上から、/j̡/ は IPA 表記では有声硬口蓋接近音の [j] ではなく、有声硬口蓋摩擦音 [j̡] である。ただし、査読者 3 の方によれば、カムチャツカ州旧コリャーク自治管区のテレビやラジオ放送で使われているコリャーク語では [j] に対応する。

(1) *Cha.*　*Al.*

ɟaɟaŋa	raraŋa	「トナカイ毛皮製ユルト」
qepeɟ	qapar	「クズリ」
ɟaɟol	tatul	「キツネ」

ただし、アリュートル方言ではすべての /ɟ/ が /t/~/r/ に対応するわけではなく、有声硬口蓋接近音の /j/ が対応する場合もある (Kibrik i dr. 2000:182, Nagayama 2003:2)。

(2) *Cha.*　*Al.*

ɟetək	jatək	「来る」
qaɟuju	qajuju	「仔トナカイ」
ŋeɟŋeɟ	ŋajjə	「山」

市郎兵衛の記した上表 1 の身体部位名称からも、次のように /ɟ/ : /t~r/ の対応関係が見て取れる。(3) はコリャーク語（チャヴチュヴェン方言）、アリュートル語、『調査書』のカタカナ表記に /ɟ/ :/t~r/ の対応が見られる語である。

(3) *Cha.*　*Al.*　『調査書』

ɟikiŋən	rəkərŋən	レゴレンガ	「口」
ɟəlɣəlŋən	təlɣəlŋən	ト°ルーウワ	「指」

加えて、(2) で示したような /ɟ/: /j/ の対応が見られる語もある。『調査書』の「イエレイ」の「イエ」は、コリャーク語の有声硬口蓋摩擦音 [ɟ] ではなく、アリュートル語の有声硬口蓋接近音 [j] を表記しようとしたものであろう。

(4) *Cha.*　*Al.*　『調査書』

ɟiləɟil	jiləjil	イエレイ	「舌」

以上のことから、『調査書』で挙げられている「土語」は、現代の方言分類でいうコリャーク語ではなく、アリュートル語であることがわかる。

３．翻刻

本節では、『調査書』の翻刻を示す。第 1 節で述べたように、翻刻は富山県公文書館史料調査員の栄夏代・中条充子両氏に全面的にお願いした。両氏はそれぞれの担当部分を決めて翻刻した後、相互チェックをおこなった。原本には各ページにページ数の記載はないが、以下では参照しやすいようにページをふってある。また、『調査書』のオリジナルの行の形式を保持したまま翻刻した。文の途中で改行したりしているのはそのためである。写真に見るようにオリジナルは縦書きであるが、本誌の性格上、翻刻は横書きで示す。以下では、紙幅の関係上、全ページの写真を掲載することはでき

ないが、参考のためにまず本文の 1 ページ目と 28~29 ページ目の写真 2 枚を掲載する。また、翻刻末尾に折込画 2 枚を掲載する。

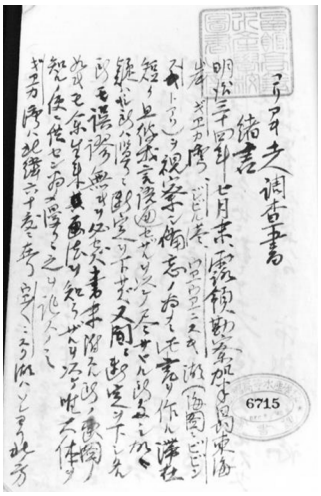


写真 4
『調査書』緒言部分（p1）

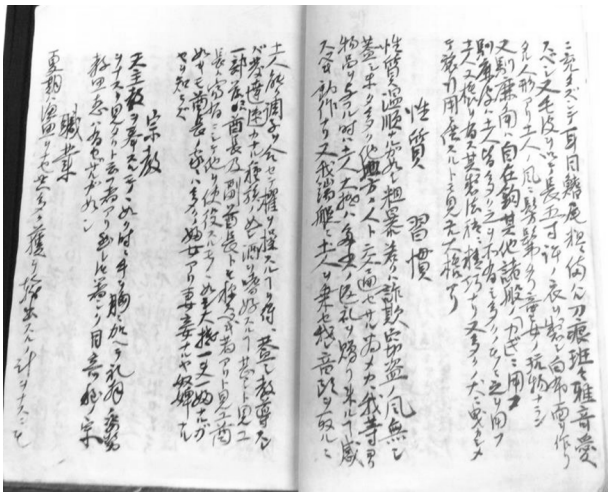


写真 5 『調査書』p28-29

＜表紙＞
『明治三十四年十二月二十一日
某人ノ取調ベシモノナリトシテ
道廳ニ提出濟』（朱書）
コリアキ土人調査書

<p1>
コリアキ土人調査書
　　緒言
明治三十四年七月末、露領勘察加半島東海
岸ギエカ湾、ジビル港、ウエウエニスキ湖（海図ニビビン
スキトアリ）ヲ視察シ備忘ノ為メニ此書ヲ作ル、滞在
短ク且彼我言語通セザルヲ以テ尽サヾル所多シ、故ニ
疑ハシキ所ハ濫リニ断定ヲ下サズ、又間ニ断定ヲ下シタル
所モ誤謬無キヲ必セズ、書末附スル所ノ画図ノ
如キモ余生来画法ヲ知ラザルヲ以テ唯大体ヲ
知ルノ便ニ供セン為メ慢リニ之ヲ記スノミ
ギエカ湾ハ北緯六十度ニ在リ、ウエ／＼ニスク湖ハソレヨリ北ノ方

<p2>
十数浬ニ在リ、シビル港ハ又其北二十浬許ニアリ

シビル港ニハ土人四十名許、仮小屋（草小屋ニ天幕等）六個
許、倉庫五個許アリ、又空屋トナレル半穴居二、三アリ
又此地ニハ露国ノ巡査一人（要帯）露国商人二人及其家
族二、三名アリ、天幕内ニ住ス
ウエ／＼ニスクニハ土人仮小屋及倉庫各六、七アリ、土人二十
五名許住ス、又半穴居ノ空屋トナルモノ四、五アリ
ギエカニハ半穴居三、倉庫三許アリ、此中土人ノ住
スル者一戸、人員七、八名
此地、此近傍、各地ニ散シテ土人ノ住居スルモノ不少
ト見ユ
　明治卅四年八月廿八日　　市郎兵衛　誌

<p3>
コリアキ土人調査書
　　参考
　　参謀本部編纂「西伯利地誌」上套自二九九頁
　　至三〇四頁左ニ記シテ参考トナス
固哩雅克（コリヤク）人ハギジギンスク府ニ住シ又ヲホートスク府ニ住ス露
人ト交通セシハ十七世紀ノ初ニシテ十八世紀ニ至リ全ク露ニ服
従セリ、游牧、土着ノ二種ニ分ツ、土着種ハ又五族ニ分レペン
ジナ湾（海図ニペンジンスク湾トアリ）ノ海岸ニ於テ十五村勘察加
半島ノ北西岸ニ六村ヲリユートル湾（海図ニヲリユートルスキ海
湾トアリ）ノ海岸ニ九村ヲナス、一千八百五十三年調ニテ土着種現
員二千五百人、游牧種ハ勘察加領ニ傍ヒ北緯五十六度以北
ニ游牧シ現員二千七百五十人
土人中ニハ今日尚ホ露国ニ獣皮税ヲ納メサル者アリ、西伯利各種族
中、己ノ自由ヲ保持セン為メ露人ト抗争シタル勇気ハ此人種
ノ右ニ出ル者無シ、嘗テカザック兵ト戦ヲ交ヘシ時ハ毎戦必ス死ヲ

<p4>
決シテ之ニ当リ戦ニ臨ミ敵兵多数ニシテ且其兵器我ニ優リ
敵シ難キヲ知ルトキハ妻子ヲ斬殺シテ敵陣ニ突入シ一歩モ退
カズ皆戦死シテ屍ヲ野外ニ暴セシト云フ
土人骨骼純粋ナル蒙古種ニアラズ、頭頂平ニシテ顔面円ク
口廣ク顴骨突出セス、眼細ク鼻高ク顔ハ肉桂色ヲ帯ヒ鬚
髯稀ニ頭髪黒シ、男子ハ髪ヲ薙リ女子ハ之ヲ辮シ既ニ嫁スル者
ハ面部ニ文ス、言語ハ歯音・喉音多ク又数派ニ分ル、露語ヲ
学ヒ得ル者少ナシ、都テ知識ノ発達甚タ鈍シ、土着種ノ
洗礼ヲ受ケシハ勘察加半島ノパラン族、ウガ族[9]、ヲリウトル族

等ニシテ其餘ハ游牧種ト云々、シヤマン教ヲ奉セリ、土人ハ狼
ヲ以テ悪神ノ僕ナリトシ之ヲ尊敬スルコト殊ニ厚シ故ニシヤマン教
ノ儀式ニ狼皮ハ欠クベカラサル祭器トナレリ、一夫数妻ヲ娶ルヲ得
ト雖実際多ク之ヲ娶ル者ナシ、慣習ノ尤モ奇怪ナルハ病者ノ
死セントスル者或ハ自殺シ或ハ人ヲシテ刺殺セシム死体ハ之ヲ火
葬シ喪服ハ白布ヲ用フ、総テ賓客ヲ厚待シ謙遊ヲ重ンズ

<p5>
然レトモ亦詐欺ヲナスモノアリ、長老ヲ撰挙シ族務ヲ司ラシム、
夏期ハ鹿皮ノ衣ヲ着シ、冬期ハ毛皮ヲ着シ毛皮製ノ頭
巾ヲ戴ク、祭日ニ用フル女服ハ縁ニ獺皮或ハ黄鼬皮ヲ縫
飾シ玻璃ノ小珠ヲ附ス
近代土着コリヤク人ノ游牧ヲ廃セシハチウクチヤ人ト争闘シテ敗績
シ馴鹿ヲ失ヒ游牧スルコト能ハサルカ故ナリ、土着スル者ハ居宅ヲ構ヘ或ハ
穴居ス、居宅ハ樹枝ヲ以テ構造シ鹿皮ヲ以テ之ヲ被フ、馴鹿ハ
土人ノ尤モ重ンスル家畜ニシテ貧富其数ノ多寡ヲ以テス、富メル種
族ハ二十万頭ヲ飼養スルニ至ル、土着族ノ重要ナル職業ハ獣猟
ナリ、野鹿、山羊、熊等ヲ主トスレトモ外海豚、海狸、海獅、海馬、
海猫ヲ猟ス、猟船ヲバイダラト名ケ樹幹ヲ刳リ海狸皮ヲ以テ
外面ヲ包ム、軽クシテ疾シ、又牛馬ヲ飼養スルモノアルモ饒多ナラズ
又鍛錬ニ従事スル者アリ、斧、小刀、鎗ハ地方土人ノ尤モ貴
フ所トス、土人鹿皮ヲ以テ衣ヲ製スルコト巧ナリ、ヲリウトル族ハ海
馬骨ヲ以テ匙、煙管等ノ細器ヲ製造ス

<p6>
遊牧種ハ数畜ノ外捕魚ニ従事シ鹿肉及ヒ血鮞ヲ食トス、又
種々ノ草根殊ニ百合花ノ根ヲ以テ食ヲ補フ、土人ハ獣皮ヲ以テ露
人ノ火薬、烟草、銅鍋ト交換ス、物品貿易ノ尤モ盛ナルハパリツォ
ウア河岸ニシテギジギンスク府ヲ距ルハ五四吉米ノ地ナリ
家居ノ種族ハ概ネヲホータ海（ヲコーツク海）ノ東岸ニ住居セシモ
終ニ所有ノ馴鹿ヲ失ヒ落魄セル遊民ノ子孫ニシテ漁業ノ外
復タ為スヘキノ業ナク、僅ニ外国ノ航海者及ヒ露商ト貿易スル
コトアリ、暴飲過食ノ慣習ハ外国ノ航海者ト交リシヨリ起リ、詐欺窃
盗ノ悪業ハ露商ヨリ伝染セリ、家居ノ土人ハ風俗極メテ頽廃シ、悪
風一般ニ行ハ西伯利ノ各種族中又如此賤ムベキ人民アルヲ見ス、然
レトモ遊牧ヲ業トスル者ハ独立自由ノ生業ニ慣レ信義ヲ重ンジ、
其風来トゥングス人ニ劣ルコトナキモ、此種族ハ政府法令等ヲ
知ラズ、僅ニ馴鹿十二頭ヲ所有スル者ハ皆一家ノ主トナリ自営ニ

[9] 査読者 3 の方によれば、「ウカ族 (Uka)」の誤りであろうとのことである。

安ンセリ、家数六七戸相集リ一小団結ヲナシ毎戸権利ヲ平等ニシ、家
産裕ナル者ヲ長老トシ、游牧地ノ撰定又ハ移住ノ時期等ヲ之ニ諮

<p7>
問シテ其意見ヲ聴クヲ常トス、故ニ游牧ヲ業トスル土人ハ上ニ主長アルヲ
知ラズ、又服従スルコトヲ知ラズ、然トモ西伯利ノ種族中最モ親愛
慈恵ノ心アルハコリヤク人ニシテ妻子ヲ待ツコト厚ク、家畜ヲ飼養ス
ルコト丁寧ナリ、所有ノ馴鹿ハ甚タ之ヲ愛セリ
土人ノ住地ハチウクチア人及カムチアツカ人ノ住地ニ接近シ、且ツ商業
上ノ関係浅カラサルヲ以テ其習慣自ラ相類似ス、戯術ハコリヤク
人ノ長處ニシテ最モ奇怪ノ技ヲ演セリ
土人長寿ナル者多シ、往々眼病ニ罹ル者アルハ薫烟ノ穴室ニ
充ルカ故也、又時々麻疹及ヒ他ノ流行病ニ罹り変死スルモノ多シ

容貌
一見日本人、支那人等ト又差無シ、顔色浅黒ク目ハ細クシテ愛
嬌アリ、鼻ハ小ナレトモ低カラズ、口大ニシテ唇薄ク一文字形ヲナス、
髭髯稀ナリ、タマ／＼之レアルモ多ク疎ニシテ赤色ヲ帯ブ、頭頂
著シク扁平ナル者アレトモ多クハ目立タザル者ノミ、身長男ハ五尺一二寸

<p8>
乃至五六寸、女ハ五尺内外、概シテ日本人ヨリ丈高シ、女ハ円顔
多シ、髪ハ黒クシテ軟カキ方ニテ男ハ多ク切リ被リナリ、又大人ニテ
モ河童ノ如ク中ゾリヲ明ケ置ク者不少間々後ロニ束
ネテ其端ヲ短ク切リ置ケル者モアリ、女ハ大抵二条ニ組ミ分ケ
テ両肩ヨリ前若クハ背後ニ垂ル毛ハ長カラズ、或ハ
毛端ニ布ヲ巻クアリ或ハ南京玉ヲ綴ルアリ、老婦ニシテ額
ニ細キ三本ノ縦筋、手甲ニ同シク三本ノ縦筋、手首
ニ二本ノ横筋ヲ文身セル者ヲ認メタリ、然レトモ老婦ニアラサレバ
既婚者ト雖文身セル者無シ、小児ニハ眼疾ヲ患フルモノ不少

<p9>
言語
言語ハ露西亜語ヲ解スルコト少ナシ

ホロシヨー 若クハ ホローシ	ニヱト	クーサイ	ウオーウク	メドウヱディ	タバーコ	コペ／＼	ニツポン 若クハ ヤンポン
宜シイ	否　若クハ	食セヨ	狼	熊	煙草	交易	日本人ヲ指ス
ホーダ	スクーナ	ヅラステ	オレーナ	サーハル	ムノーゴ	モイ	
宜シカラズ	帆船	「今日ハ」	馴鹿	砂糖	多イ	自己ヲ指ス	
ダ	カピタン	ドーロウオー	ソバーカ	チヤーイ	ワダ	オロスキ	
然リ	船長	人ニ逢ヒタルトキノ挨拶	犬	茶	水	露西亜人ヲ指ス	

以上記スル所ノ露語、若クハ其訛音ハ土人ノ僅ニ解シ又語ル
所ナリ、然レトモ酋長ハ尚多少ノ露語ヲ解スルモアレド、土人ノ
内ニハ前記ノ言語スラ充分ニ知ラザル者アリ
土人語ハ日本人ニハ満足ニ真似難キ程ノ不思議ナル発音ヲ
有ス、又「ラリルレロ」ヲ捲キ舌ニテ発音スルニ妙ヲ得タリ、婦女
ハ「ン」ト響ク音ヲ多ク用フルガ如ク其音調断續明

<p10>
減シテ普通ノ談話モ日本人ノ耳ニハ悲哀ノ調ヲ帯ビテ
聞コユ
左ニ土語若干ヲ掲グ

土語	日本語	土語	日本語
アショーアシ	鱒	ヱゲンヌマ	鼻
オイテーオイテ	オシヨロコマ	レゴレンガ	口
タかーイヱ	鰈	ミルー	耳
オヱムイテ	カヂカ	レルーウ	髭
メタンヌ	蚊	ラオロッカ	顔
ワンニガット	河獺	ワンノーオィ	歯
パリト	上着（コート）	イヱレイ	舌
コナーユ	ヅボン	ドルーウワ	指
プラーコ	長キ靴	ムノーウ	手
シュワーレ	短キ靴プラーコ、ノ上ニ重ス	ワガラグヌ	爪
レレーウイ	目	ヲッターヲッタ	木
パナウ	砥石		

<p11>
以上記スル所日本仮名ヲ以テハ完全ニ土語ノ発音ヲ現ハシ難シ
又其音ヲ聞取ルコトサヘモ難事ナリ、又土人ノ常用語中ニ
　アッタカ　　アマルカ　　ヤッカイナッタ
等ノ語ヲ多ク交ヘ用フレトモ其何ノ意タルヲ知ラズ、又「然り」（イヱス）
ト挨拶スベキ場合ニ「ノ」若クハ「ノー」ト云フコトアルガ如シ、蓋
シ土語ナラン、又
　ケタ　若クハ　ケタ／＼　　「鮭」ノコト
　ウォーツカ　　「酒」ノコト
ノ語ヲ用フレトモ其土語ナルヤ露語ナルヤヲ明カニセズ
　我等ト土人ト初対面ノ時、土人多ク「ヅラステ」ト挨拶ス（露語
「ヅドゥラウスティーティ」ノ略ニテ即チ「今日ハ」トイウコト）、然ルニ其後面会セ
ルトキハ土人多ク「ドローウオー」ノ挨拶ヲ用フ（蓋シ露語「ドーブル、ウートラ」

<p12>
（即チ英語ノ「グッド、マーニング？」）及露語「ドーブル、ウエチエル」（即チ英語ノ「グッドイ
ブニング」？）ヲ訛用シテ時ヲ撰バス挨拶セシナルベシ）、我等之ニ対シ
「ドロボー」「ドロボー」ト呼ヒテ挨拶スレバ土人笑ツテ首肯
セリ、蓋シ佳謔ニアラズ

衣服

男女共多ク馴鹿皮製ノモノヲ用フ、上下二枚ヨリ成リ上ナルハ
「ボタン」ヲ用ヒザル「カブリシヤツ」ノ如ク下ナルハ「ヅボン下」ノ如シ、男ノ上着ハ
裾膝ニ達セズ、女ノモノハ膝下ニ及ブ、上着ハ毛ヲ内ニス、
「ヅボン」即下着ハ毛ヲ有セザルガ如シ、何レモ皮ハ粗造ナカラ鞣
セリト見ユ、先ツ下着ヲ穿チ、然ル後上着ヲ被ル、襯衣ヲ
用ヒズ、又上着ノ後ロニ外套頭巾ニ似タル頭巾（皮製）
ヲ附スルアリ、又胸ニ涎レ掛ノ如クニ方形ニシテ毛ヲ外ニシタル
馴鹿皮ヲ垂ルヽモノ多シ、上着ノ襟ハ頗ル寛濶ニシテ小

<p13>
児等ハコヽヨリ片腕ヲ現ハシ肌脱キニナリテ遊ブモアリ、良キ
上着ハ袖、襟、裾、「ポケット」ノ縁等ニ獺ノ毛皮ヲ附ス、又
南京玉ヲ綴リテ飾レル衣服モアリ、樹皮ノ繊維様ノモノ
ヲ腰ノ辺ニ垂レテ飾レル衣服モアリ、胸部ニ「アイヌ」土
人ノ刺繍ニ似タル方形ノ刺繍ヲ施セル衣服ヲ婦人ノ着用
セルヲモ認メタリ、足ニハ馴鹿皮製ノ長靴ヲ穿チ多クハ
又其上ニ「ヲーバーシチス」ノ如キ馴鹿皮製ノ短靴ヲ加ヘ紐ヲ
以テ足首ノ辺ニ束ヌ、長靴モ良キモノハ上縁及胴ノ中辺
等ニ獺ノ毛皮ヲ飾リ或ハ胴ニ南京玉ヲ飾ル、又小革
片ヲ縫合シテ美シキ模様ヲ現ハセル靴、胴ニ於テ縦ニ「ヒダ」
ヲ取リタル靴等アリ、又鞣革製ノ手袋（拇指ノミ分チ
タル）ヲ有ス
又羅紗ノ古洋服ヲ纏フ者アリ、又露西亜更紗ノ衣ヲ

<p14>
縫フ者モ不少、老男子ニシテ赤キ更紗ノ衣ヲ着スルハ一
見頗ル異風ナリ
頭ハ通常之ヲ露ハセ共、外出スル時ハ上着ニ附キタル頭巾ヲ
被ルコト多シ、又古帽子ヲ戴ク者モアリ、婦人ハ多ク布片ヲ
纏ヘリ

食物

鱒・鮭等ノ生魚ヲ煮食シ、又此等ノ魚ヲ天日ニ乾シタル
モノヲ炙リモセズ其侭ニテ食ヘリ、海獣油ヲ此乾魚ニ附
ケテ食フ様恰モ欧米人ガ麺麭ニ牛酪ヲ附スルニ似タリ
蓋シ乾魚ハ日常ノ食物ニ供スルハ勿論ナレトモ、多クハ冬季ノ
食料トシテ貯フルモノナルベク又旅行ノ弁当ニハ軽便極マ
ルモノト見ヘタリ、又草苺（クサイチゴ）、フレップ等ノ菓実ヲ野ニ採リ
テ食フヲ見受ク、又五葉松ノ青キ実ヲ採リ食フ、又海岸

<p15>
ノ草中ニ多キ防風ノ葉ト茎トヲ採リ食フコトアリト土人自ラ
言ヘトモ稀ナルガ如シ、農耕ヲナサズ、又夏季ハ銃猟ヲ廃シテ
漁業ヲナスガ故ニ獣肉ニ乏シ、故ニ大抵魚肉ヲ主トシテ食
スト見ヘタリ、又六七月鴨・鴎類ノ卵ヲ穫ルコト多ク之ヲ
「ユデ卵」トナシテ用ユルガ如シ、又鴨・鴎類ヲ捕食スルコトアレトモ弾薬
ヲ惜シミテ多ク捕ラズト見ユ
又鮭・鱒ヲ漁シ、腹ヲ剖キ首ヲ切リ之ヲ製造スル傍、生ノ
マヽ其魚ノ鼻、上鰐ノ辺ヲ噛チリ食フ、小娘等ガ草上
ニ踞シ右手小刀ヲ握リ、左手生魚ノ頭ヲ携ヘ口端ヲ赤
黒ク血ニ染メテ之ヲ賞味スル様ナドハ奇観ナリ
馴鹿肉ヲ貯蔵スル者アレトモ濫リニ用ヒズト見ユ、又馴
鹿ノ舌ヲ乾燥シタルモノアリ、上等ノ食品ニシテ珍客ヲ饗ス
ルニ用フト見ユ、又露人ト交易シタルナラン「バター」、砂糖等ヲ

<p16>
蔵スル者アリ、又同シク交易ニヨリテ得タル麦粉ヲ以テ焼餅
様ノモノヲ拵ヘ之ヲ食スル者アリ、蓋シコレ等ノ交易品ヲ用フ
ルハ多クハ酋長ノ如キ者ノミト見ヘタリ、又ギヱカノ土人ハ
馴鹿ノ乳ヲ貯ヘタルヲ見タレトモ其他ニ於テハ之ヲ認メズ
煙草ハ土人之ヲ嗜好スルガ如キモ其有スル所ハ粗大ニ刻ミタル
モノヲ咬ムナリ、火ヲ點シテ喫用スルコト稀ナリ
酒ハ土人ノ最モ好ム所ニシテ我等ノ到ル所土人先ツ馴鹿皮
製ノ上着ヲ示シテ、ソレト酒ト交換センコトヲ請ハザル無シ（曰ク
ウオーツカコペ／＼ト）、蓋シ土人酒ヲ嗜メトモ得ル所少ナク、タマ／＼
露人ト獣皮ヲ以テ交換スルコトアルモ、直チニ飲ミ盡シテ貯
フルコトヲ知ラズト見ユ
シビルニ於テ露商ノ倉庫中ヲ見タルニ、貯フル所ノ交易品
大部分ハ麦粉ニシテ又少シノ米ヲモ有セリ
土人天日ニ乾シ貯フルモノ鮭、鱒、及其筋子、鰊、コマイ、昆布等
アリ

<p17>

住居

夏期ハ漁業ヲ目的トシテ臨時ニ海岸適宜ノ地ニ出張スルモ
ノニテ其本宅ハ別ニ海岸ヨリ遠ク陸地ニ入リ込ミテ建テ置ケ
ルガ如シ、故ニ漁業地ニ於テハ大抵馴鹿皮ヲ以テ掩ヒタル仮小
屋、布製ノ小天幕、草葺ノ仮小屋等一時的ノモノ
ヲ認ムルノミ、然レトモ亦一、二ノ本宅ラシキモノヲモ見受ケタリ
馴鹿皮ニテ掩ヒタル仮小屋ハ細長ナルコト竹幹ノ如キ
円材ノ多クヲ組ミ合セテ骨トシ、其上ヲ馴鹿皮ニテ掩ヒ頂上
ヲ烟出シ及ヒ導光ノ為メニ明ケ置クモノニテ、馴鹿皮ノ天
幕ト称シテ可ナルベキモノナリ、其骨組ハ一見蝙蝠傘ヲ開キ
タルニ似タルモノアリ、縄若クハ釘ヲ用ユルコト殆ンドナク円材各
自ノ端ニ簡単ナル窪ミヲ作ルコト図ノ如クニシ巧ミニ抱キ

<p18>

合セテ之ヲ組立テタリ、蓋シ此美シキ円材ハ土人ノ到ル所ニ携ヘ
行キテ之ヲ組立ツルモノト見ユ、又布製ノ小天幕ハ露本國ノ
蚊幮ヲ輸入シテ家屋兼蚊幮（土人住地一帯蚊多ク昼夜
ノ別ナク人ヲ襲フ）トシテ用フル所ナルベク大抵一間四方以内ノ大キサ
ニテ其形日本ノ紙帳ニ似タリ、若シ土人丸木船ニ乗シ
順風ヲ得テ湖中ヲ走ル時ハ此家屋兼蚊幮ハ之ヲ裏ガヘ
シテ赤キ布地ヲ露ハシ丸木船ノ上ニ懸クレバ忽チ紅帆ト化シテ
風ヲ青山白水ノ間ニ孕ミ一、二ノ水禽且ツ飛ヒ且
ツ游キテ一幅ノ画図ヲ成スコトアリ
土人家屋ノ内部ハ床板等ハナク皆馴鹿皮ヲ地上ニ敷キテ其
上ニ踞スルニ過キズ、戸棚引出シ等ノ設モ元ヨリ無ケレバ少シバカ
リノ荷物ハ怪シキ箱若クハ馴鹿皮中ニ蔵メテ室内ニ狼
藉タリ、又二、三ノ本宅ラシキ家ヲ見タルニ已ニ廃屋トナリタ
ルニヤ若クハ夏期ハ其中ニ住ムヲ好マザルニヤ皆空屋ナリ

<p19>

其構造ハ占守島辺ノ土人小屋ト同シク木ヲ組ミ其上ニ草ヲ
敷キ又其上ニ土ヲ載セタルモノニテ半穴居式ナリ、家ノ頂上ニ
窓アリ、又一方ノ側面ニ「トンネル」然タルモノアリテ屋外ニ突出
シ、其端、上ニ向テ口ヲ開ク、蓋シ出入口ニシテ「トンネル」ヲ匍匐
シテ室ノ内外ヲ交通スト見ヘタリ、窓及出入口共上ニ向ツテ
開キ側面ヲ厳重ニ囲ムハ蓋シ風雪及寒気ノ闖入ヲ防
キ且烟ヲ追ヒ又積雪ニ其口ヲ埋メラレザル等ニ便利
アルガ為メナランカ、又其口ハ馴鹿皮等ニテ適宜ニ雪囲
ヒヲ施スコトヲ得ルモノト見ヘタリ、此半穴居ノ骨組モ亦材木

ノ両端ニ窪ミヲ付ケテ各材相互ニ組ミ合セ縄釘類ヲ用ユルコト
無キガ如シ、蓋シ上ニ載スル土ノ圧力ニテ縛着若クハ釘
着セザルモ能ク解体セザルヲ得ト見ユ
倉庫ハ高サ一丈許ノ丸木ノ櫓ノ上ニ円錐形又ハ方錘
形ニ構ヘ屋根ハ草葺ナリ、又床ハ丸木ヲ並ヘ若クハ

<p20>
樹枝ヲ敷キ其上ニ枯草或ハ馴鹿皮等ヲ布キタリ
床ノ下（即チ地上ヨリ一丈許ヲ隔ツ）ニハ一面ニ乾魚ヲ懸垂シ、
又櫓ノ上ニ於テ倉庫ヲ繞リ、二段位ニ欄干様ノ木ヲ
構ヘコレニモ一面ニ開キタル鱒・鮭及鰊・筋子ノ類ヲ懸ケ
以テ天日ニ乾ス、蓋シ櫓ヲ構フルハ冬季積雪中ニ埋モ
レザル用意ナルベシ、又此櫓ヲ昇降スル為メノ梯子ハ丸木ヲ
縦断シ、コレニ足ヲカクル穴数個ヲ穿チタルヲ用ユ、此倉庫
中ニハ乾魚・馴鹿皮、其他ノ獣皮等ヲ貯フルヲ見ル
又ウエ／＼ニスクニハ露西亜風ノ丸木小屋一アリ、酋長所有ノ
倉庫ニシテ中ニ毛皮及雑品ヲ貯ヘ戸ニ錠ヲ施セリ

器具

厨具ハ露本國ヨリ輸入モタリト見ユル、銕鍋、亜鉛鍋
盥、陶製ノ皿、匙等少許を有スルノミ、ウエ／＼ニスクノ酋

<p21>
長ハ支那製ト見ユル、塗リ盆等ヲ蔵シ珍客接待ノ時
出シ用ユルヲ見ル
猟具ハ小銃及槍ヲ有ス、小銃ハシビル酋長ノ家ニハウイン
［十二連銃（ウインチスター）ナリト云フ］チスター銃アリ、ウエ／＼ニスキ酋長ハ露国軍銃ノ廃物ラシ
キ粗末ナル後装銃ヲ所有セリ、然レトモ一般土人ノ所有スル
奇銃ハ其製法如左
　銃口六角形ニシテ小サク銃身長サ三尺許、流木ナラン
　ト思ハルル粗材ニテ銃床ヲ造リ葉鉄ノ「バンド」ヲ嵌シ
　銃ノ中部ニハ二脚ノ木台ヲ添付シ屈伸自在ナラシム
　引金ハ鳥獣ノ骨ニテ造リタル故引骨ト称スベク打金ハ
　銕ノ先ニ燧石ヲ夾ミタルモノナル故打石ト称スベシ、即チ此
　打石落ツレバ下ニ備ヘタル銕板ト相打テ火花ヲ散
　シ、其火花ハ銃身ニ横穿セル小孔ヲ伝ヒテ火薬ニ移ルノ

<p22>
　装置ニシテ燧ト鉄板ト相打ツトキ火花燦然頗ル具合

　ヨキヲ見タリ
土人ガ此小銃ヲ発射スル法ハ先ツ銃口ヨリ火薬ヲ入レ込メ
矢ニテ突キ、次ニ粗造ノ円弾（鉛）ヲ葉ニ咀ミテ入レ口火
孔ニ少許ノ火薬ヲコボシ置キ然ル後、引金ヲ発スナリ
カク不便ナルニ拘ラズ土人ノ之ヲ操縦スルコト迅速ナリ、又引
金ノ燧石ハ時々小刀ヲ以テ其稜角ヲ鋭クシテ之ヲ用フルナリ
槍ハ其柄長凡六尺、穂先ハ巾広クシテ鋭利ナリトハ見ヘズ、小
銃ニテ猛獣ヲ仆シタル時、此槍ヲ以テ獣ニ近ツキ之ヲ刺スナリ
ト土人言フ
漁具ハ曳網及「ヤス」ヲ有ス
曳網ハ長サ大抵十五間、「アバ」ハ丸木ヲ小口切ニシ中央ヲ土瓶
ノ蓋ノ「ツマミ」ノ如ク小高クシテ横ニ小孔を穿チ、コレニ「アバ縄」
ヲ通ス、「アバ縄」ハ海獣皮ノ紐ナリ、「イワ」ハ小石ノ中央ニ小孔ヲ

<p23>
穿チ革紐ニテ「イワ縄」ニ縛着ス、縄類ハ総テ皮紐ナリ、網
ハ麻糸ナラント思ハル
此網ヲカケマハスニハ小舟ヲ用ユルコト稀ニシテ多クハ長三四間
ノ丸木三本許ヲ継キタル竿ニテ陸ヨリ網ヲ水中ニ押出
シテカケマハシ、時ヲ計リテ之ヲ曳クナリ
「ヤス」ハ柄ノ長三間許ノ木ノ端ニ革紐ヲ以テ銕鉤ヲ縛
着シタルモノニテ、鉤ハ尖端ハ前方ニ向ヒ其根ノ方ハ湾曲シテ
柄ノ端ニ縛スル革紐ニ夾ム、土人川岸ニ踞リ鮭鱒ノ
泝（遡）上スルヲ認メ、之ヲ以テ突クトキハ鉤尖魚体ニ入ルト共ニ鉤ノ
根ハ竿ヲ離ル、然レトモ別ニ細長キ革紐ヲ以テ豫メ柄ノ他部
ニ縛着シ置クヲ以テ此時柄ヲ繰リ入レバ、魚ハ釣鉤ニカヽリシ
如キ形ニテ引寄セラルヽ装置ニシテ、蓋シ色丹土人ノモノト同一
ナリ
舟ハ露国ノ「カビタン」（船長）ガ造リタルモノナリトテウエ／＼ニスキニ

<p24>
底平田ノ如ク舷側「ボート」ノ如クニ造リタル一艇アリシモ土人固
有ノモノハ三種ヲ見タリ
第一　周囲一抱許ノ流木長十五間及長十八間許ノモノヲ刳リ
丸木舟トナシタルモノ二本ヲ平行セシメ、数本ノ横木ヲ以テ之ヲ
連結シタルモノニテ船体ノ側面ニ各二小孔ヲ穿チ革紐ヲ
以テ船体ト横木トヲ縛着セリ、二本ノ丸木舟ノ間ハ凡五寸
許離レコヽニ横木ノ上ニ一枚ノ板ヲ敷キ、乗者ハ此板若クハ横
木ニ腰ヲ安ンズ
第二、周囲二抱程ノ丸木ヲ刳リ横ニ数本ノ桟ヲ渡シ

タルモノ、即チ前記第一ノ丸木舟ヨリモ大材ヲ用ヒ一本ニテ
用ニ堪ヘシメタルモノナリ
第三、細キ丸木ヲ以テ巧ミニ骨組ヲナシ其外部ニ海獣
皮（海驢（アシカ）皮ナラン）ヲ張リタルモノ長凡三間、舳部扁平
ニ開キ支那靴ノ形ヲナシ頗ル奇ナリ、獣皮ハ数枚ヲ革

<p25>
紐及獣類ノ筋等ニテ縫合シ舟ノ骨組ト皮トハ革紐
ニテ縛着セリ
各舟皆軽快ナレトモ波高キ所ニハ浮ベ難カルベシ、櫂ハ木
ノ柄ニ板ノ小片ヲ革紐等ニテ結着シタルモノ、若クハ粗末
ナガラ一本ノ木ニテ造リタルモノモアリ、手ニ持チテ之ヲ操シ
若クハ船ノ縁ニ二本ノ棒ヲ立テ其間ニ櫂ヲ夾ミテ操スル
モアリ
ウエ／＼ニスキニ破損セル侭ニ廃棄セル車アリ、木片ヲ曲ゲテ
輪トナシ其合ハセ目ニハ前ニ小木片ヲ当テ木釘及革紐、樹
ノ繊維等ニテ結着シ木板ヲ以テ十字形ノ輻ヲ構
ヘ輻ノ端ハ車軸及車輪ニ嵌ス、故ニ軸
ト輪トハ同時ニ回転スルノ装置ナルヲ以テ更ニ円筒ヲ縦
断セルニ等シキ木ヲ軸ニ被セ外ヨリ之ヲ縛着シ此上ニ物
ヲ載セ以テ軸ノ回転ニ障害ナカラシメタリ、土人曰ク人之ニ

<p26>
乗リ犬ヲシテ牽カシムト、蓋シ四輪車ニシテ軸上ニ板若ク
ハ丸木ヲ構ヘ土人之ニ乗ルナルベシ、其製法粗雑ナルヨリ察
スレバ堅ク平カナル雪ノ上ニ用フルニアラザレハ用ニ耐ヘサルガ如シ、然
レトモ雪ノ上ナレバ寧ロ橇ヲ用フルヲ遥ニ勝レリトスベシ、蓋シ
車ノ話ヲ其本国人ヨリ伝聞シ土人中ノ智者ガ工夫シ
テ如此モノヲ製出セシモ不便ニシテ実用ニ適セサル為メニ
之ヲ草野ニ擲棄シタルニ過キザルベキ歟
鉄具ハ斧、小刀等少許ヲ有スルノミ、皆本国ヨリ輸
入スル所ナルベシ
細長ク木ヲ刳リタル犬ノ「食物入レ」アリ、多数ノ犬同時
ニ首ヲ入ルルノ便ヲ計リタルモノナルベシ
草ニテ編ミタル篭アリ、形、鍔無キ麦藁帽子ニ似タリ
苺ナド入レ又諸般ノ物ヲ入ル、又麻袋、馴鹿皮ノ袋等アリ
鴨ノ卵、其他ノ物ヲ容ル草籠ハ真田ニ組ミ獣ノ筋ノ

<p27>
纖維ナドニテ縫合セタルモノニテ婦人手芸ナリ
革紐ノ投石器アリ、長五尺二寸、一端ニ孔アリ、又中央部ニモ
細長形ノ孔アリテ革ヲ二条ニ分ツ、他ノ一端ニハ別ニ短カキ革
紐ヲ通シテ其端ヲ三条トナセルモノナリ
土人之ヲ弄スル法、一端ノ孔ニ左ノ中指ヲ通シ中央部紐ノ
二条ヲナセル所ニ小石ヲ安置シ紐ヲ折リ返シテ他端三条
ヲナセル部分ヲ左ノ拇指ト食指トニテ抑ヘ先ツ此紐ヲ
前後ニ回転スルコト数回、機ヲ計リテ三条ヲナセル一端ヲ
放テハ石ハ声ヲ作シ弾丸ノ如キ勢ヲ以テ遠ク飛ブ、土人之
ヲ以テ飛鴟ヲ打ツニ当ラズト雖遠カラザルヲ見ル、且其
操縦迅速ニシテ一旦幾個ノ小石ヲ拾ヒ之ヲ手中ニ蔵セ
バ頻々器ヲ発シテ我等ガ単発後装銃ヲ発スルヨリ
遥ニ速カナリ
土人小刀ヲ以テ海象（ウオラス）ノ牙材ニテ犬狐、鮭等ヲ刻ス、大サ寸

<p28>
ニ充タズシテ耳目鰭尾粗々備ハル、刀痕班々雅奇愛
スベシ、又毛皮ヲ以テ長五寸許ノ衣ヲ製シ白布面ヲ作リ
タル人形アリ、土人ノ風ニ髣髴タリ、童女ノ玩物ナラン
又、馴鹿角ハ自在鉤、其他諸般ノ「カギ」ニ用フ
馴鹿皮ハ土人皆多ク之ヲ所有シ多クノモノニ之ヲ用フ
土人又橇有ス、其製法稍々精巧ナリ、又多クノ犬ニ曳カシメ
テ旅行用ニ供スルトモ見ユル大橇アリ

性質　　習慣
性質温順ナルガ如シ、粗暴若クハ詐欺窃盗ノ風無シ
蓋シ未タ多ク他地方ノ人ト交通セサル為メカ、我等ヨリ
物品ヲ与フル時ハ土人大抵ハ多少ノ返礼ヲ贈リ来ルコト感
スベキ動作ナリ、又我端艇ニ土人ヲ乗セ我レ音頭ヲ取ルニ

<p29>
土人能ク調子ヲ合セテ櫂ヲ操スルコトヲ得、蓋シ教導スレ
バ発達速カナル種族ノ如シ、酒ヲ嗜好スルコト甚シト見ユ
一部落ニハ酋長及副酋長トモ称スベキ者アリト見ユ、酋
長ハ富有ニシテ他ヲ使役スルモノヽ如シ、大抵一夫一婦ナルガ
如キモ酋長ノ家ニハ多クノ婦女アリ、妻妾ナルヤ奴婢ナル
ヤヲ知ラズ

宗教
天主教ヲ奉スルモノノ如ク時ニ手ヲ胸ニ加ヘテ礼拝ノ姿勢
ヲナスヲ見タリト云フ者アリ、然レトモ著シク目奇程ノ宗
教思想ハ有セザルガ如シ

職業
夏期ハ漁魚ヲナセ共、多ク穫テ輸出スルノ計ヲナスニも

<p30>
アラズ、自家ノ食料、犬ノ食料ヲ貯フルニ過キサルヲ以テ
漁法及動作頗ル緩慢ナリ、蓋シ土人ノ本業ハ漁季
以外ノ時ニ於テ海岸ヲ去リ山ニ入リテ獣猟ヲナスニアルナル
ベシ
馴鹿皮ノ多キ所ヨリ察スレバ土人皆多少、馴鹿ヲ牧ス
ト思ハル、而〆山野ニ其足跡及排泄物ノ夥シキヲ認ムレトモ
一モ獣ヲ認メタルコトナキヲ以テ考フレバ海岸ヲ離レテ土人ノ
本拠アリ、馴鹿ハ皆此処ニ牧養シ濫リニ放牧セザルナラ
ンカ（但シ我等ノ眼ニ馴鹿皮ト見ヘタルモノノ内ニハ野鹿皮
モアリタルヤ知レズ）

雑事
土人多クノ犬ヲ有ス、其種類、日本種ニ酷似シ口尖リ眼
小ニシテ円ク、尾ハ上ニ巻キタリ、其数多キコト寧ロ人口ニ勝

<p31>
レリ、此犬土人ガ網ヲ曳ク所ニ徘徊シ魚頭ノ投与ヲ得テ喜ヒ食
ヘリ、土人地ヲ掘ルコト凡五尺四方許、其中ニ生魚ヲ入レ樹枝
ヲ載セ海草類ヲ掩ヒ、更ニ土ヲ其上ニ掩フテ之ヲ蔵ス
冬季ニ於ル犬ノ食餌ナリト云フ、此如モノ草野ノ中所々
ニ設ク
又土人ノ繁殖力ハ中々強盛ナリト見ヘ、シビル湾ニ於ル土
人ノ半数ヨリ以上ハ小児ナリト見受ケタリ
土人ハ日本ノ俗ニ「ツッコクリ」ト称スル如キ装置ニテ鴨ヲ
捕フルコトアルヲ言ヘリ
土人ハ鮭、鱒、鰊、コマイ、筋子等皆剖キ、多クハ丸ノ
侭ニテ櫓ニカケ之ヲ干燥ス、塩蔵法ヲ用ユルコト無キ
ガ如シ、又乾魚中ニハ犬ノ食料モアリト云フ、其櫓ノ
近傍ニ至レバ異臭鼻ヲ衝ク

<p32>
土人ハ入浴等ヲ要セサルモノト思ヘ、身体不潔ナリ
土人馴鹿ヲ屠リタル跡ヲ見ル、山間ノ平地ヲ相
シテ之ニ当ツト見ユ、毛、皮、角、蹄等ノ砕片散乱
セリ、其状ヲ推想スルニ屠殺ハ六七月ノ中ニ於テシ
多少ノ儀典ヲ挙グル等ノコトアルガ如シ
（因ニ云、馴鹿角ハ毛皮ヲ以テ追掩ハルルニ似タリ）
土人、相撲ノ技ヲ有ス、上着ヲ脱シ「ヅボン」ノミヲ着シ二人相
対シテ、組ム手ヲ地ニツキ、膝ヲ地ニ屈スルガ如キハ負ケトナラ
ズ、体全ク仆ルヽニ至リテ、勝敗初メテ決ス
土人又馬ヲ有ス、シビルニ六七頭、ウエ／＼ニスクニ、二、三頭アリ、其
体格小ナラズ、蓋シ本国ヨリ輸入セル所ナルベシ、又鞍ヲ
有シ、旅行多クハ馬背ニ依ルガ如シ
土人ノ猟獲物ハ赤熊、赤狐、狼、白狐、黒狐、白兎

<p33>
貂、海象牙等アリ、此他、熊ニ似テ熊ニアラズ、犬ニ似テ
犬ニアラズ、貂ニ似テ貂ニアラズ、狼ニ似テ狼ニアラザルガ如キ
種々異様ノ毛皮ヲ有ス、獺皮モ有スルコトアレトモ稀
ナリ、黒狐、白狐等モ稀ナリ
蓋シ土人ハ其冬季間猟獲スル所ノ獣皮類ヲ以テ
露本国ノ商人齎ス所ノ酒、烟草、麦類、火薬、布
類、鉄器、其他雑品ト交換ヲナスノミ、ラム酒、ブランデ
一等ノ一瓶二留位ヲ標準トスルガ如シ
露政府ヨリハシビルニ一人ノ巡査（カザック種ナルベシ）
ヲ駐在セシメテ此地方ヲ取締ルニ止マリ租税等ノ如
キハ察スル所、直接土人ヨリ徴収セズシテ、寧ロ土人ト
交易ヲ行フ露商ヨリ取ルナランカ、宗教、教育、其

<p34>
他、一ノ施設ヲ見ズ、唯自然ニ放任セルガ如シ、若シ他
国人、一葉ノ船彼地ニ航シ、窃ニ土人ト交易ヲ行フコト
アルモ、軍艦ノ来リ咎ムルモノアルニアラズンバ制裁ノ道
アラズ、而〆此土人ハ一見シタル所、容貌日本人ニ近キ
コト、寧ロアイヌ土人ニ比シテ遥ニ優レルヲ見レバ彼
等モ亦、異種ノ露人ヨリ却テ日本人ニ親シムノ
心、豈アラザラン乎
土人ノ酋長ハ、西洋蝋燭及燭台等ヲ有シ、其衣
服、靴等モ華美ナルモノヲ蔵ス、且ツ其倉庫内ヲ
一見スレバ多ク有価ノ品ヲ貯ヘテ頗ル富有ニ見ユ、日本ノ

下級人民ノ如キ、彼等土人ノ前ニ出レバ、却テ顔色ナカルベシ
我船員、漁夫等ガ襤褸ヲ着、草鞋ヲ穿チテ網ヲ曳
ク状態ノ如キハ、土人ノ目ニハ寧ロ劣等人種トシテ映シタルナ
ランカ嗟

写真 6　折込画 1

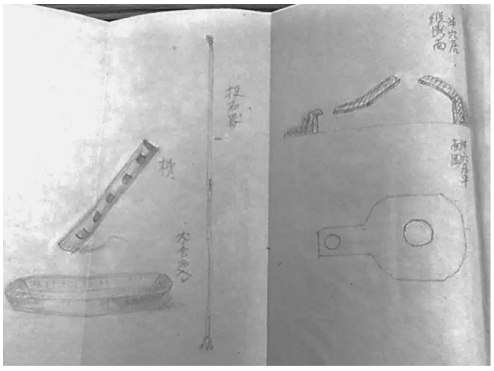


写真 7　折込画 2

参考文献

アバ, ラファエル

2015　「外国語学習から見た鳥居龍蔵の学問的な歩み」『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館研究報告』2:1-21.

原 暉之

1998　『ウラジオストク物語―ロシアとアジアが交わる街』東京：三省堂.

桂川甫周

1990　『北槎聞略 ― 大黒屋光太夫ロシア漂流記 ― 』（亀井高孝校訂）（岩波文庫青456-1）東京：岩波書店.

Kibrik, A. E., Kodzasov, S. V. i Muravyova, I. A.

2000　*Jazyk i folklor alutortsev.* Moscow: Nasledie.

Kibrik, A. E., Kodzasov, S. V. and Muravyova, I. A.

2004　*Language and folklore of the Alutor people*. ELPR Publication Series A2-042. Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.

Kurebito, M

2001　*Comparative Basic Vocabulary of the Chukchee-Kamchatkan Language Family:*1. ELPR Publication Series A2-011. Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.

Nagayama, Y.

2003 *Ocherk grammatiki Aljutorskogo jazyka*. ELPR publication series A2-038. Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.

岡本信男（編）

1971 『日魯漁業経営史　第一巻』東京：水産社.

参謀本部編纂課

1892 『西伯利地誌 上』参謀本部.

関秀志・桑原真人・大庭幸生・高橋昭夫

2006 『北海道の歴史（下）』札幌：北海道新聞社.

Skorik, P. Ja.

1968 Chukotskij jazyk. In Vinogradov, V. V. (ed.), *Jazyki Narodov SSSR* V: *Mongol'skie, tunguso-man'chzhurskie i paleoaziatskie jazyki*, 248-270. Moscow/Leningrad: Nauka.

Stebnitskij, S.N.

1937 Osnovnye foneticheskie razlichija dialektov nəməlanskogo (korjakskogo) jazyka. *Pamjati B.G.Bogoraza* (1865-1936), 285-306. Moscow/Leningrad: Izdatel'stvo ANSSSR.

渡部裕

2001 「カムチャツカ先住民の文化接触 ― 北洋漁業と先住民の関係」『北海道立北方民族博物館研究紀要』10:17-46.

渡部裕

2011 「カムチャツカにおける日本漁業とロシア／ソ連漁業の関係 ― 日本人漁業は何をもたらしたか」『北海道立北方民族博物館研究紀要』20:119-136.

Zhukova, A.N.

1968 Korjakskij jazyk. In Vinogradov, V. V. (ed.), *Jazyki Narodov SSSR* V: *Mongol'skie, tunguso-man'chzhurskie i paleoaziaskie jazyki*, 271-293. Moscow/Leningrad: Nauka.

Koriaki Dojin Chousasho
—Annotation and Republication—

Megumi KUREBITO
University of Toyama

Natsuyo SAKAE
Toyama Prefectural Archives

Atsuko NAKAJOU
Toyama Prefectural Archives

The purpose of the present paper is to annotate and republish the Japanese book, *Koriaki Dojin Chousasho (A Report on the Indigenous 'Koriaki'),* hand-written by a Japanese man named Ichirobei in 1901. The book is regarded linguistically very valuable, because it contains not only the description of the manners and customs, and food, clothing and housing of the 'Koriaki', but also the 27 native words notated in katakana, which give us the clue to identify the language which the 'Koriaki' speak.

Annotation of the book is mainly focused on the language which 'the Koriaki' speak and tries to prove that the Koriaki speaks not Koryak but Alutor through analysis of the katakana notation.